

アーティストインタビュー

渡部三妙子さん

—幼少期の頃からちょっとお伺いしたいなと思います。どのようなお子さんでしたか？

渡部：ああ。全然記憶にはもうないんですけど。なんか親曰く、幼稚園の頃は、ピンキーとキラーズとかね、はやってましてね。で、それをまねて踊るのが大好きだったみたいですね。人前に出るの好きだったみたいですね。そんな幼稚園。だけど、我は強かったんじゃないかな。3月生まれだから。周りの子たちよりも幼いじゃないですか？ 運動会でバトンを持つ子になりたくて。やりたいって言ったらだめだったんですよね。で、へそ曲げまして、お漏らしして、お母さん来るまでパンツ取り替えない(笑)。悔しい。そんなおぼろげな記憶はあります。こっち来て、きっと人の顔を見るというか、いい子ちゃんでいたい性格、それは今もなんですけれども、が強かったんじゃないかな。強い子でしたね。よく見せたいみたいなね、があると思うんですけども。出会いはね、4年生の時の先生ですね。4年生の時の先生が、あれは『さるかに合戦』。学芸会で、『さるかに合戦』で、猿いっぱい、カニいっぱい。で、猿のほうは男の子ばかりだったんです。カニのほうは女の子たち集団だったんですけど。猿の大將が、ちょっとイケてないと、先生の判断でね。で、みーちゃんやってみてって言われた時に、はって開けたんでしょね、きっとね。それで、男たちを従えた猿の大將でやったのが、うわーお芝居って面白いと思った最初かな。

—クラスでは目立ちたいなだったり、前に出るほうでしたか？

渡部：って見られがちなんですけども、結構、控えめってというか。出せないってというか。出たいことには出たいんですよ。だから、生徒会も立候補とかもやったんですけど、お勉強嫌いな子で。今もですけど、頭良くないんですね。っていうのもあったし。だから、たぶん、小学校、中学校、高校時代の子が、「渡部、何やってんの？」って言うと、「渡部、新聞出てたね」とかね、「お芝居やってるの？」とかっていうふうに聞くと、あの渡部がってなるらしい。そんな感じ。

—ありがとうございます。では、中学生に上がってからののこととかも、お願いします。

渡部：中学生、もっともっと、地味になっていったかな。中学生。小学校の地域から、ちょっと仙台市内なんですけども、別の地域に引っ越したんですよね。だから、小学校ってその地域の子たちがそのまま中学校に上がっていくじゃないですか、ほほほほ。なので、転校生みたいな感じだったんですよね。ちょうどね、ギリギリな世代。長いスカート引きずってとか、こういう人たちが先輩たちについて、うわあみたいだね。ちょっと控えめな感じだったかな。とはいえ、友だちには恵まれていて。なんか悪さもしましたね。あ、こういう人たちとの悪さではなくてね。

—いたずらのことですか？

渡部：うん。いたずらってことでもないかな。わちゃわちゃやりましたね。

—青春時代。

渡部：そうねえ。

—中学時代は、演劇に関わるようなこと、出来事とかは特になかったんですね？

渡部：小学校の『さるかに合戦』から渡部は面白いっていうふうになって。それから何かって言うと、なんか主演じゃないんですけど、ちょっと牛耳る役とか。なんか影のおいしい役で、サブ的な役で。でもそっちのほうがおいしいでしょ。で、そういうのに抜擢されてて、大暴れしてたんですよね。だから演劇好きだっていうのがあったんですね。なので、運動部とクラブとっていうのがあって、文化部はクラブ活動で週に1回なんですけども、そこで演劇部入ってた。

—ありがとうございます。そこから高校生になった三妙子さんのエピソードもお聞きしたいんですが、高校はどちらの高校ですか？

渡部：高校は宮学。宮城学院にまぐれで入りまして（笑）。本当、頭悪い。で入って、演劇、宮城学院は部じゃなくて班って言うんですね。演劇班って言うんだけど。で、いろいろ見たんだけど、バレーボールも下手だったし、宮城学院の演劇班の扉をノックして、入って。で、その頃って、なんて言うんですか、アングラ系というか、若い娘には何だろなあみたいなものがぎゅーっといろいろと盛んだった頃で。そこに運命的な出会いがありまして。そこの私の1個上の先輩が、佐々木久美子さんですね。その先輩がいたから、そこにいついたって感じかな。そうですね。休み時間になると、先輩の教室にばかり行ってました。で、先輩の背中を追って、すごく面白い。その頃から、すごい先輩だなんて思っています。今もかわいがってもらってるんですけども。役者さんとして素晴らしいなと思っています。

—今のおむらいすファクトリーができるまでのお話も聞かせていただいてよろしいでしょうか？

渡部：はい。なので、その4年に一遍の市民参加型ミュージカルっていうのをおむらいすでやって。で、何かやりたい、非日常を経験したいとか。お芝居やってみたいっていう人たちを集めてやるっていうのがすごく面白くて。すごくエネルギーがかかるけど。そういうのをやっていきながらも、そういう活動を見ていった、これも文化事業団の方で、もう別なところに行った方なんですけども、庄司さんと、彼が声かけてくれて。「帯広でね、よさこいのチーム作りたらしいんだけど、渡部ちゃんところでちょっとやってくんないかな？」って言われて、「はい、やります」。そこで帯広との出会いがあって、帯広のよさこいチームの振り付けを通してやって作って、エクスクラメーションって言うんですけども。で、そこから、そこを立ち上げた中心のお兄ちゃんが、すごい開拓者で。で、ここでも市民ミュージカルやるっていうので、私たちを呼んでくれて、帯広で市民ミュージカルを作って。

それが、すごくなんか自信になったんですね。その頃のビジネスグランプリみたいなのがあって、そこに出したら賞もらって。あ、仕事になるのかもしれない（笑）。それで、その頃のメンバーとコツコツコツコツ、資金貯めて、会社興しました。

— 帯広で、自信がぐっと付いたっていうのは、何か具体的にどんな体験がその自信につながっていったんですか？

渡部：全く別の都市で、また全く価値観の違う人たちと作ったっていうのが、また面白かったんですよね。仕事にしたいって思ったんだと思う。もっとやりたいていうか。こういうふうな場所を求めている人たちがいるんじゃないか。で、そういう、なんていうのかな、表現の裾野っていうかきっかけっていうか、そういう場所づくりを私はしたいと思った。劇団を作って作品をぐーっと仕上げていく、もちろんそれはいいものを作ろうってする気持ちは変わらないと思いますけれども、なんかそういう人たちに、こういう世界を知ってもらいたい、表現って面白いよ。相手と作るって面白いよ。そういうふうな一歩が、次の一歩につながるんじゃないかっていう、場所づくりをしたいって思ったのが、っていうか、思ったっていうか思っていたんですけれども、これを仕事にしようっていうのが具体的にになったのがそれがきっかけかな。

— 創設から今までのおむらいすファクトリーの歴史を教えてくださいたいのですが。創設は何年になりますか？

渡部：今年で 18 期になるので。18 年前。2005 年。2005 年です。2005 年の 3 月になってるかな。本当に出会いがあって。やるかっていう声をポンってかけてくれる人がいて、すごく恵まれているなっていうのがあるんですけども、そういうふうなつながりがあったかな。その前のね、おむらいすファクトリーができる 2、3 年前になりますけれども、福島のローカル地方局で、『ぐるっと福島見聞録』っていう番組があってで、それは私と、小畑次郎さんだったの。小畑次郎さんと、私が、一緒ではないんですけども、福島の各町を回って、美味しいものとか温泉とか紹介する旅番組を 2 年ぐらいやらしてもらったのかな。たまに小畑次郎さんと一緒に飲む機会もあったんですけどもね。もったり。あとはずーっと AZ9 はやらせてもらっていてっていうのもあったり。あとは、テレビのお仕事で、昔、森総理から小泉総理に変わるときに、結構宮城県連がこのへん、こうしてくださいね。が、反旗を翻すみたいなことがあって。その CM で私が出た時に、全国ネットになったの。それもまた出会いなんですけども、そんな、CM に出ちゃったことを、大将の新田新一郎さんにえらい怒られましたけども、政治

色が付いちゃいけないじゃないですか。だけどそれがあって、トントンといって、TBC、東北放送の、ローカル地方番組のMCに選ばれちゃって。ちょうどそれが会社を興した年だったの。それで、何も知らない私が、ただカメラ回せばしゃべれるっていうだけで抜擢されて1年やったんですけども、視聴率が伸びなくて、結局1年経ってなくなっちゃったんですけど。ただ、会社を興した時がそれをやらしてもらったので、その勢いは付けさしてもらったかな。

あとはもう、とにかく公演を。そうね、2005年でしょ。で、2002年に子どもミュージカルとの出会いもすごく大きくて。これは吉川由美さんってすごいプロデューサーがいるんですけども、彼女の声かけで、子どもミュージカル立ち上げたい人がいると。で、お手伝いして。で、そこからの親御さんに、みーちゃんたちも作ったらって言われて、作ったのが、たまごファーム。子どもミュージカル劇団たまごファーム。それが2002年にできて。子どもたち、最初は2、3名だったんですけども、同じ気持ちです、結局、市民ミュージカルと。子どもたちにもきっかけ。あ、いいんだよって、そう思うことっていいんだよ、当たり前なんだよっていうふうな勇気を持てるきっかけを作りたいねっていうので、子どもミュージカル、たまごファームが先だったの。で、その3年後に会社を作って、3年後だ。作って、子どもたちもどんだんどんどん増えていって。子どもたちのミュージカル。あとはね、同じ時期に登米市の子どもミュージカルをやらなかったっていうのがあって、登米市のドリーム☆キッズっていうのができあがって、それもその頃から。だからずっと、たまごファームと登米のドリーム☆キッズっていうのをやらせてもらいながらも、いろんなお仕事、司会とかなんとか、制作とか、言っていたオペラの仕事とかっていうのをずっとやらせてもらって、なるとかなんとか、くー、わらしべのように、長者のように、蜘蛛の糸のように、会社を続けてるっていう感じです。

大河原：長い時間演劇を続けてきて。で、それでも目の前にまた公演があって、次の5月も公演されるということで。仕事として教えてるっていう。でもそれは仕事というよりかは、もう自分の、ほぼライフワークじゃないけれども、自分の生き方として子どもたちと携わって、市民たちと携わってミュージカルを作っているっていう中で。モチベーションってすごく難しいと思うんですよ。モチベーションは、元は何ですかね？

渡部：人。

大河原：でしかないんですよ。

渡部：でしかないし、それでいいと思ってるんですね。だから、インプットっていうふうなことを言われたら、今そうだなと思ったのは、その目の前にいる人たちです。

大河原：三妙子さんにとって、演劇、ミュージカルっていうのは何ですか？

渡部：出会い。

大河原：出会い。

渡部：出会い。

大河原：主に人ですか？

渡部：はい。人です。

大河原：なるほど。分かったような、分かったふりをしているんじゃないかと、今、自問自答してるんですけど。なるほど。人との出会いが、自分にとってのミュージカルである。人と出会う場所ですか？

渡部：人と出会う場所であったり。人と人が何かしようとした時に、見えてくるものであったり。そんな相乗効果の時間が、たぶん好きなんですね。

大河原：きれいな歌や、華やかな装飾や、衣装とか、華やかなものを現実逃避で美しいとするっていうこととは、全然違うお答えなんですね。

渡部：そうですね（笑）。全くその通りです。おっしゃる通りですね。

大河原：じゃあありがとうございました。

渡部：よろしいですか？

大河原：はい、ありがとうございます。

渡部：ありがとうございます。

大河原：じゃあ止めてください。

渡部：ありがとうございました。